



ビジネストーク

「矜持」

頭取 大道 良夫

映画「柘榴坂の仇討」(浅田次郎原作、若松節朗監督)が9月20日から公開されています。それに先立ち、彦根で試写を鑑賞しました。

『桜田門外の変』で敬愛する主君・井伊直弼を失い、仇を追い続ける男。大老を暗殺した後、身を隠し孤独に耐える男。そして二人を陰で支える心優しい女たち…。江戸から明治へ激変する時代のなか、13年の時が流れ、ついに二人の男は巡りあう。しかしそこには、思いがけない運命が待ちうけていた。(パンフレットより)

映画では「矜持」(きょうじ)「誇り、自負」がテーマとして全編に流れます。死守すべき主君を目前で暗殺された武士が、明治維新で「負け組」になった後も長屋暮らしを続けながら、武士としての「矜持」を捨てずに生きる姿。

私は試写後、久しぶりに本物の時代劇を見た。気持ちの高ぶりが、しばらくの間、治まりませんでした。武士の「矜持」と覚悟、そして日本人の魂が、少ない台詞とアクションながら、物腰や表情、ちょっとした動作に見事に表現されています。

彦根藩士志村金吾を演じた主演の中井貴一さんは、滋賀県広報誌「滋賀プラスワン」で「私たちが今何をすればいいのか、日本を思うつて何だろうか、考える機会となれば」と述べています。また試写

後の舞台挨拶で中井さんは「生きることの美しさと大切さを訴えたかった」、酌婦をしながら志村を支える妻を演じた広末涼子さんは「言葉が無くても思いが伝わる素晴らしい日本映画」とも語りました。

井伊直弼の歴史上の評価はさまざまです。独断で調印した「日米修好通商条約」、強権で反対勢力を肅清した「安政の大獄」などで、よくないイメージをお持ちの方も多いかと思いますが、私がこの映画で見た井伊大老は、今もなお彦根で敬愛される通りの偉大な人物でした。映画を通じて全国の皆さんに井伊大老の真の姿を、と願います。

原作の「柘榴坂の仇討」など6編を収録した「五郎治殿御始末」の巻末で、中村吉右衛門さん(映画では井伊直弼役)と対談の浅田次郎さんは、井伊大老の「矜持」について「御三家に対し積極的にぶつかっていく。それは譜代筆頭としての誇りだと思ふ。会社で言えば、生え抜き社員の筆頭と経営者一族の角逐(かくちやく)と語っています。

映画が描き出した井伊直弼と志村金吾の「矜持」。それを受けた私の思いは「経営者としての矜持を持つて臨むべし」ということでした。まだまだ至りませんが、努力してまいる所存です。ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。